

淡水、大気と水の制御など

生態系機能の60%が劣化

国連大学、ミレニアム評価事務局 報告書で警告

国連大学高等研究所とミレニアム生態系評価(MA)事務局は先月三十日、「ミレニアム生態系評価プロジェクト総合報告書東京発表会」を東京都渋谷区の国連大学ビルで開催した。報告書によると、淡水、大気と水の制御、地域の気候など生態系の機能は、約六〇%が劣化、または非持続的に利用されていると指摘している。検討した二四の生態系機能のうち、一五の生態系における機能劣化の進行は、地域気候を突然変化させる可能性を増加していると警告を発している。

気候急変の可能性増大

同プロジェクトは九五カ国によって実施された。報告書によると生態系の機能の多くが劣化、一三〇〇人の専門家に「人類が依存している」化し続けられ、環境保護と

いう目標に向けた進捗は持続しないだろう」と述べている。特に、進行しつつある生態系機能の劣化は、二〇〇〇年に国連で世界の指導者が合意したミレニアム開発目標の障害になるとしている。

また、地球気候を制御する炭素固定の増大など四つの生態系機能だけが過去五〇年間に高まってきたと強調している。専門家は、こ

れらの問題は将来世代の便益を著しく損なっているとしている。

増大する需要に合わせながら生態系の悪化を反転させることは、政策と制度を大きく変える、いくつかのシナリオの下で可能である。

劣化を食い止めるか、あるいは他の機能にプラスの影響を与える生態系機能を保全したり高めたりする選択肢についても言及。例えば、自然林の保護は野生生物を保全するだけではなく、淡水を供給し、炭素の排出を減少させる。

MA理事会は、「すべての人々によりよい生活水準をもたらすよう自然機能を利用しながら、地球の自然機能に加えている緊張を和らげることが、人間社会の力に掛かっている」と結論付けている。

コフィ・アナン国連事務総長はビデオメッセージの中で「環境及びそれがいかに機能しているかを理解することによってのみ、環境を保護するのに必要な決定を行なうことができる。我々の貴重な自然と人間資源すべてを尊重することによってのみ、持続可能な未来を築くことができる」と述べた。